

日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ
2000年 夏号 No. 20

発行 日本行動分析学会 理事長 小野浩一
〒154-8525 東京都世田谷区駒沢1-23-1 駒澤大学文学部心理学研究室
電子メール: j-aba@komazawa-u.ac.jp
電話: 03-3418-9303(心理学研究室事務室)
FAX: 03-3418-9126(日本行動分析学会事務局と明記して下さい)
ホームページアドレス: <http://behavior.nime.ac.jp/~behavior/>

学会に行こう！

第18回年次大会は、来る9月9日(土)と10日(日)の両日、東京学芸大学で開催されます。すでに皆さんのお手元には準備委員会より大会プログラムが届いているかと思いますが、ニューズレター前号でも直前情報をお知らせ致しましたが、大会の目玉をここに再掲致します。会員の皆さん、会員でない学生さんや同僚の方も誘って出かけて、大会をおおいに盛り上げましょう！

- ・ 記念講演『21世紀に向けての特別支援教育—応用行動分析の役割—』
山口薫(東京学芸大学名誉教授)
- ・ 研究委員会企画シンポジウム『医療現場における行動分析』
- ・ 自主シンポジウム
『地域に展開する行動分析：その新しい枠組みと方法論を探る』
- ・ 大会準備委員会企画シンポジウム
『知的障害養護学校における応用行動分析—その適用の現状と展望—』
- ・ ABA紹介・ABA情報コーナー

私の好きなこの論文

リレー特集
望月昭(立命館大学)

先に予告しましたように、今回から標記タイトルのリレー特集をスタートします。第一回目としては、言い出しっぺの責任で、広報担当の私が書くことになりました。そこで、改めてこの特集の趣旨と私の好きな「この論文」を紹介します。

誰しも、これまで行動分析を学ぶ過程の中で、その後の研究行動に影響を及ぼした色々な「出会い」があったと思います。行動分析そのものを心理学の中から選んだきっかけとしては、特定の人物が浮かぶという人も多いと思います。そういう「この先生」特集は、大御所の先生に書いてもらえば心理学史的観点から非常に意義深い場合もありますが、すでに色々なところでやられていますし、われわれ小御所が書けば、とかく様々な社会的随伴性に大きく影響を受けて、書くことの気苦労のわりには読者の共感を受けにくい可能性も出てきます。そこで、人との出会いではなく、ここでは「論文との出会い」というのを試してみたいと思います。ここで言う「論文との出会い」というのは、その後の自分の研究や仕事の弁別刺激として重大な意味を持つ、というような純アカデミックなものから、自分の研究とは直接関係ないけれど、行動分析という枠組みを選択していく上で、大いなる確立化操作となった、さらには、とまあ大好きだ、というものに至るまで幅広く扱いたいと思います。

今回、私が紹介する論文は、応用行動分析誌(JABA)に1980年に掲載された、ロン・バンハウテン、ポール・ナウ、ゾピト・マリニによる「都市部のハイウェイでのスピード違反を減じるための公共標識物の分析」です。原題は、

Ron Van Houten, Paul Nau, and Zopito Marini.
An analysis of public posting in reducing speeding behavior on an urban highway.
Journal of Applied Behavior Analysis, 1980, 13, 383-395.

この論文は、70年代から盛んに行われた、ゴミ捨て、省資源、交通問題などを扱った「行動的地域心理学」(Behavioral Community Psychology)の実験のひとつで、ご存じの方も多いと思います。それまで行動分析の代表的な応用領域としては、障害児教育や臨床などが典型的でしたが、これら一連の「行動的地域心理学」の研究は、より広く様々な社会問題に有効にコミットできることを示したものであるでしょう。さらに、障害児教育関連では、基本的に、行動の獲得(acquisition)の部分、ひいては「子どもが変わる」というニュアンスのもとでの課題設定が多いのに対して、これら地域関連の研究においては、行動というものを、より徹底的に、個人(集団の事が多いですが)と環境との関係の問題として捉え、どこまでも環境の変更の必要性を訴える点で、非常に清々しい(つまりはラディカルな)ものとも言えます。それはABABデザインを抵抗なく使える事態、と表現することもできると思います。



Van Houten ら (1980) の図より

このバンハウテンらの研究は、カナダの都市部のハイウェイで、スピードの出しすぎを、掲示物で抑制しようというものです。具体的な手続きは、図に示したように、「昨日、スピード違反をしなかったドライバーは、昨日は* * %、ベスト記録は+ + %」という掲示物を道路の傍らに示すというものです。数字部分は日々変わることになります。そして、このような表示が、特にスピードの高いドライバーの速度抑制に効果があること、そして具体的な数字を示すことが重要であった、という結果を得ています。

私はこの研究が好きです。まず、とにかくこの図(原版は写真です。是非それを直接ごらんください)を見るたびにその素朴さというか単純さに頬がゆるみます。数字のプレート(きやたつ)に乗って毎日取り替える人の姿を想像するだけで、大いになごみます。具体的数字による効果については、ドライバーが常に監視されているという、ネガティブな形での行動抑制である、という解釈もできますが、私は、断固そういう風には考えたくない。ドライバーは「よし、そんならオラも新記録に貢献すぞ」といった気持ちで参加していると信じます。表示を出す人もドライバーも、なんて良い人たちなんだろう。そういう(勝手に想像してるわけですが)なごやかな雰囲気の中に事が進んでいく、というノリが好きです。

私は、この論文を、障害児教育や福祉実践の講義などで、現役の学校の先生や福祉職員の人に、「正の強化」について、その理屈ではなくその導入に際してのノリを理解(実感)してもらうための道具としてよく利用しています。まず、講義の最初で、「スピード違反を減らすにはどうしたら良いでしょうか」という問いかけをして各自に答えてもらいます。真面目な先生は、罰金を厳しくするか、道路に突起物(スリーピング・ポリスマンと呼ばれるらしい)を設置するか、ネガティブなコントロー

ルを提案してくれます。確かに日常的には、「注意一秒、怪我一生」などにみられるように、交通や運転に関する行動に関しては、ネガティブに統制しようとするのが殆どで、そうした中で「正の強化」による統制への発想の転換はなかなか難しいものです。先生たちの回答もそうした日常にひかれてしまうのは当然と言えるでしょう。

ネガティブな提案が出尽くしたところで、このバンハウテンの論文を紹介して、こんなポジティブな方向もあることを提言します。特に、そのほのぼのとした雰囲気、こんなんやったらどうなるだろう、といった、闊達で楽観的な実践主義を行動分析の特色として最大限アピールします。そして、対比的に、交通問題についてのもうひとつの論文を紹介します。それは、シートベルト装着を、負の強化で維持しようとしても、除去する嫌子(シートベルトをしないとブザーが鳴るなど)の内容が厳しいほど、人は装置自体を破壊してしまう(その随伴性のルール自体から逃避してしまう)というゲラーらの研究(Geller, Casali, & Johnson, 1980; Journal of Applied Behavior Analysis, 13, 669-675)です。

これを紹介することで、負の強化や罰によるコントロールの難点を強調します。障害児教育や福祉領域でも、問題行動への対処といった場合、いまだ罰や負の強化などのネガティブな手段を用いる発想がいまだにありません。ある意味、まじめな先生ほどそういう傾向があります。そして、やらなくて当たり前、守って当たりの事をしてなぜ誉めなきやいかんのだ、といった発想からの転換には、いきなり教育や福祉現場での問題として理屈で説得してもやはり抵抗がある場合があります。バンハウテンの実験のような、いったん日常的な教育福祉業務のしがらみから離れたテーマを扱うことは、発想の転換としての正の強化の導入や、そのノリを実感して受け入れてもらうためには、回り道のように、実は有効な手段ではないかと思えます。

新記録の樹立の喜びをドライバーと分かち合えるような設定を考えていく際のわくわくした感覚は、まさにポジティブ・ビヘイビアサポートの実施における核心的部分と言えるでしょう。

次の筆者として、山形県立保健医療短期大学の佐竹真次氏を指名します。どうぞ宜しく。

こんな本を書いた！ 訳した！ 読んだ！

『パフォーマンス・マネジメント—問題解決のための行動分析学—』

島宗理 著
米田出版 2000年3月 1700円(税別)

島宗理(鳴門教育大学)

何かうまくいかないことがあると、相手や自分、会社や社会を責めてしまいがちなのが人間ですが、それだけでは問題は解決しません。人生を楽しく生産的に過ごすためには、悪いところばかり見つけるマイナス思考を、解決策を見つけようとするプラス思考へと転換することが肝心です。本書では、パフォーマンス・マネジメントを、行動分析学を活かした問題解決的思考法と捉え、事例や研究にもとづいた物語として、分かりやすく紹介しました。部下との人間関係、品質管理や安全管理、社内教育、恋愛、スポーツ、ダイエット、学級崩壊、公衆道徳、企業理念の実現など、幅広いテーマに、主人公とその仲間たちが挑みます。『行動分析学入門』(杉山他著、産業図書、3600円+税)と一部登場人物がオーバーラップする姉妹本です。

『図解 心理学のことが面白いほどわかる本』

渡邊芳之・佐藤達哉 著
中経出版 2000年4月 1400円(税別)

渡邊芳之(帯広畜産大学)

心理学のほんとうの面白さ、一般の人から見たときの価値というのは、人の行動や「こころ」の間

題に常識とはひと味もふた味も違う「心理学的な見方」を与えることだと思います。しかし、町にあふれる「心理学入門書」の多くは(心理学者によるものであれ、そうでないものであれ)常識を覆すというより、常識とうまく一致した「心理学風の知識」でお茶を濁しているだけのように見えます。そこでこの本では心理学的知識の中でもっとも「常識から外れた」考え方である行動主義、行動分析学の知識を軸にしなが、身近な現象や問題を一般の人にも楽しめるように分析することを試みました。

とくに私が担当した章のうち、「人間関係はどうすれば良くなるのか」の章では、古典的条件づけの原理から対人魅力や対人関係の構造を解き明かすとともに、対人関係上の問題を解決する客観的な方法を提示しました。また「やる気を起こすメカニズムがある」の章では、オペラント条件づけと行動分析の原理をきちんと説明した上で、人の意欲や動機が環境との相互作用の中でどう形成されるのか、やる気を起こすためにはどのような環境の調整が有用なのかをわかりやすく解説しています。そのほか、「性格」や「心の動き」を扱った章でも人の行動や「こころ」が環境との関わりの中で作られ、変化していくものだという基本姿勢はもちろん一貫しています。その上で心理学の諸分野や歴史についての多少ひねくれた概説も書いてありますので「心理学入門書」としてもそれなりに役立つでしょう。

執筆には2年の時間と多くのトラブルや苦勞をともなった本ですが、一般の人にわかりやすく、という狙いはある程度成功したようで、おかげさまで4月の刊行以来すでに3版を重ねています。行動主義者が一般の人から「わかりやすい心理学の入門書を紹介して」と言われてもメンタリズム的なものしか選択肢がない、という現状の改善に、この本が少しでも役に立てるなら喜びです。

『自己表現力の教室—大学で教える「話し方」「書き方」—』

荒木晶子・向後千春・筒井洋一 著
情報センター出版局 2000年4月 1300円(税別)

向後千春(富山大学)

「Web日記」なるものをつけている。自分のホームページで、毎日日記を書き、それを公開している。本来、秘密のものであるような日記をインターネットで公開するなんて変だ、といわれる向きもあるかもしれない。その変なことをやっている人は、長谷川芳典さんをはじめとして、行動分析学会の中にもいる(ひょっとすると二人だけかもしれない)。

Web日記をつける人はどんどん増えている。この現象を明らかにしようと社会心理学の研究者たちがアプローチしている(たとえば山下清美さん)。行動分析学からアプローチするとすればどのようなものになるのだろうか。

自分でWeb日記を書いていて感じるのは、自分が考えたことを文字にしておくこと、大げさにいえば一日生きたことの証拠のようなものを未来のために残しておきたいようだ。また、何か書けば、必ず何らかの反響が来るものだ。その反響が翌日の日記を書く原動力になる。毎日書くのは大変でしょう、と人は言う。実際のところ大変だ。しかし、それにも慣れてきた。

日記を書くことが自己表現力をつけることにつながるのかどうかは、よくわからない。でも、とりあえず話す技術と書く技術を身に付けたいという人には、ぜひこの本をお薦めしたい。ワンポイントで簡潔にまとめられた項目に目を通すだけでも、なんだかうまく話せたり書けるようになったような気分になる。

『学習の心理—行動のメカニズムを探る—』

実森正子・中島定彦 著
サイエンス社 2000年6月 1500円(税別)

中島定彦(関西学院大学)

学習心理学の教科書です。全10章のうち、古典的(レスポナント)条件づけとオペラント条件づけで各3章を占めるという、日本の学習心理学教科書には珍しい構成になっています。また、1章

分を馴化・鋭敏化に当てているのも特色です。無脊椎動物から人間まで多くの動物に当てはまる学習の法則を解説しています。ある先生から頂いたメールへのお返事を転載して、さらなる紹介に代えたいと思います。

〇〇〇〇先生

拝復

教科書『学習の心理』お褒め頂きありがとうございます。基本的に見開きで英語を使わないといった条件などもあり、執筆にほぼ2年を要しました。何かお気づきの点がございましたら、刷増または改訂の際に参考にさせていただきますのでよろしくお願い致します。

「学習心理学」の変質の件、私も同様に感じております。日本では「学習心理学」が教育心理学・教材心理学・学校心理学になりつつあると思います。心理学概論の教科書でも、学習の章で条件づけについて全く触れられていないものを見受けるようになりました。著者が動物実験に詳しくないこと、条件づけなど学習の基礎は人間に当てはまらないと考えていることがうかがえます。しかし、英米の学習心理学の教科書は依然として条件づけ主体です。

拙著を読んだ学生が、心理学における動物実験の意義・人間を含めた動物の行動に規則性があることなどを感じ取ってくれるといいなあと思っています。

敬具

『メイザーの学習と行動—日本語版第2版—』

J・E・メイザー 著(磯博行・坂上貴之・川合伸幸 訳)
二瓶社 1999年9月 4000円(税別)
坂上貴之(慶應義塾大学)

どんな優れた着想を持つ学問体系であっても、それを教える優れた教科書がなければ、その学問体系を学び、それに新しい事実を加え、その上で新しい発想によって過去の知の集積を組替えていくフロンティアたちを育てていくことはできないであろう。本書は学習と行動の研究を教える、現在得られる最も優れた教科書の1つである。一方本書の欠点は、少なくとも行動分析学についての概念的な枠組みを与える教科書ではないことである。したがってある研究者達は、この教科書を一人の連合論者の観点からまとめた、教科書にすぎないと評するであろう。しかし、一冊をもって行動分析学のすべてを語りつくすことは至難の業である。実験的行動分析、応用行動分析、数量的行動分析、概念的行動分析といった広い領域について、今ようやくいくつかの教科書やその代わりに用いることのできる研究書が生まれきたばかりである。この「メイザーの学習と行動」は、もし教授する者が、その導入に行動分析学の概念的枠組みを丁寧に解説すれば、実験的行動分析のかなり広い部分の成果を伝えるよい教科書として機能するであろう。また、連合理論の優れた導入を行えば、これまた連合論の歴史に見事に接続された恰好の学習の教科書となろう。そして訳者達も、かような視点に立って、その翻訳に力を注いだのである。

『これならできる教師の育てるカウンセリング』

國分康孝・中野良顯 編著
東京書籍 2000年4月 2000円(税別)

西村美佳(上智大学)

私と同じ教育学出身の中野先生が、國分康孝氏とともに、カウンセリング界に一石を投じる書物を出版されました。「学校カウンセリングは、不登校などの一部の子どもではなく、全ての子どもを対象とする予防・開発的な教育活動である。心理的疾患の治療を専門とする臨床心理士だけに学校カウンセリングを任せて良いか? 教育のプロフェッショナルである教師でなければできないカウンセリングがある。それを解明しよう。」これがこの本全体を貫く理念です。

本書では、育てるカウンセリングについて、「何を育てるのか」という教育哲学と、「どのように育てるのか」というカウンセリング方法学の両面からアプローチしています。

育てるカウンセリングの必要性は、以前から気づかれていましたが、「何を育てるのか？」についての徹底した議論は、残念ながら希薄でした。全ての子どもが 幸せな自分の人生を送れるようになるためには、どんな能力を身につければよいのか？ この問いに明確な答えを出し、それを従属変数として位置づけてこそ、独立変数としての育てるカウンセリングを議論することが可能になるはずです。カウンセリングは技法の寄せ集めではなく、目標達成の程度によって評価される 目的志向的でアカウンタブルな活動です。本書ではカウンセリングの行動目標を 明確にするとともに、プログラムとしてのカウンセリングと行動目標との間の因果分析の必要性を行動分析の立場から忍び込ませたところに、大きな特色があると言えるでしょう。

ではそうした行動目標は、どうすれば効果的に育てることができるのでしょうか？ この問いに編者を含む12人の著者が、自らの実践を踏まえてプログラマティックな答を出しています。直接教授法、進路指導、ピアサポート、地域ぐるみの子育て組織など、どの章を取ってみても「これならできる！」と思わず飛びつきたくなるほど、具体的な手法や教材で満ち溢れています。

上智大学学習心理学研究室では、この夏、この本を教材に読書会をしました。本書を通して教育現場の直面している現実の問題に触れることができ、単なる言葉遊びには終わらないホットな議論が展開されました。

みなさんはいま、学校が学校という環境の持つ本来の「教育力」を十分生かしきっていないのではないかと、もどかしさや苛立ちを感じてはおられませんか？ 本書はこれらすべての人々に対する熱いメッセージです。知的刺激に満ちた本書を手がかりに、学校カウンセリングの本来の在り方をめぐって、広く生産的な議論が巻き起こることを期待しています。

上智大学学習心理学研究室

研究室紹介

今井義人(上智大学)

これから私たちの研究室(中野良顯教授)の様子をお伝えするのにふさわしいトピックをいくつか選んで、お話しすることにしましょう。

1. 研究プロジェクト

私たちの研究プロジェクトは、どれも教育現場と深く関わっていて、社会的に重要な問題に焦点を当てようとするものです。

第1は、大学における応用行動分析の研究と教育に関わるものです。第17回日本行動分析学会では、今井・中野(1999)が上智大学の心理学研究法の実習における行動分析の基礎概念の教授実践を発表しました。またワシントンで開かれた第26回国際行動分析学会では、中野・西村(2000)が、「使うべきか使わざるべきか? : 日本におけるシングル・サブジェクト・デザイン」と題するポスター発表をしました。後者はスウェーデン行動分析学会から「わかりやすい発表賞」(Legibility Award)をいただきました。

第2は、UCLAのロヴァスとの共同研究の一環としての自閉症早期介入です。これはわが研究室最大のプロジェクトであり、中野先生が東京学芸大、UCLA、筑波大、上智大と30年に渡って間断なく展開されてきた自閉症の臨床研究の流れを汲むものです。第17回日本行動分析学会では、中野・京極(1999)、山本・中野(1999)、宮崎・本田・西村・今井・中野(1999)が、それぞれ国際共同研究の現在と、早期介入の実際と、親の養育支援プログラムの開発成果の一部を発表しています。

第3は、学習障害児に対するソーシャルスキル訓練です。これは先生が東京学芸大学と筑波大学で行った自閉症と知的障害の子どもたちの社会技能訓練の研究を下敷きにして、上智大学において学習障害の子どもたちを対象に発展させたものです。年単位の臨床プロジェクトとして、5年目を迎えています。日本LD学会第7回大会では、今井(1998)が2年間に渡る研究成果の一部を発表しています。昨年からは、これらの知見を公立小学校の通級制情緒障害学級の子どもたちに適用して、その有効性を検討しているところです。

第4は、学校ガイダンス・カウンセリングの研究です。先生、西村、それに筑波大学の花屋らは、松戸市の公立中学校のいじめ問題予防のための地域ぐるみ子育てプロジェクトにボランティアとして参加して、今年で6年目を迎えました。先生は今年になって『これならできる教師の育てるカウンセ

リング』(東京書籍)と『スクールカウンセリング・スタンダードーアメリカのスクールカウンセリング プログラムの国家基準ー』(翻訳、図書文化)を相次いで出版されました。この二著については、院 生と学部生19人が夏休み中に読書会を開いて精読しました。この分野の研究成果の一部は、西 村・松丸・中野(2000)が、日本カウンセリング学会第33回大会で、「ピアサポートプログラムの開発 と中学生への適用の 試み」と題して、発表しています。また別の2人の院生は、東京都立新宿山吹 高校で学校カウンセリングとキャリアカウンセリングの臨床実習に取り組んでいます。

2. 臨床会議

私たちの研究室の最も重要な会議は月例の臨床会議です。先生はじめ、博士・修士課程に在籍 する院生、学部のゼミ生、研究生など、総勢20名ほどが参加します。主に院生のケースリーダーが 自閉症や学習障害の子どもたちのケースについて報告し、チームメンバーが補足のコメントをし て、今後の最善の処遇について全員で自由討議します。現在対応しているケースは15件と多数な ため、どんなに工夫しても、会議はいつも3時間以上かかってしまいます。それでも、ケースリーダ ーにしてみれば、先生や他の学生からアドバイスをもらえますし、他のリーダーが真剣に取り組ん でいる様子を見て鼓舞されもしますので、時間の経つのを忘れるほどです。また、全員がすべての ケースのプログレス・レポートに目を通すことができ、各自がどんな姿勢でケースにかかわり、どん な問題に直面しているかがはっきりしますので、臨床活動を介してゼミ生の団結がひとりでは強ま ります。

夏休み中の8月初旬にも、月例臨床会議が開かれました。ジーナ・グリーンの新ニューイングランド・ センターや、近くのメイ・センターなどを訪ね、自閉症の早期介入の研修を終わって帰国したばかり の4人の大学院生の研修報告が主テーマでした。ニューイングランド・センターの早期介入では、 幼児一人当たり年間4.5-6万ドルかかるそうで、その費用は州と教育委員会が負担すること、集中 治療は最低週30時間は必要だと考えられ、親も15-20時間は受け持っていることなど、興味深い 最新の情報が詳しく報告されました。休み中の閑散とした校舎の中で、学習心理学研究室だけは 学生が忙しく出入りして、臨床実践や勉強会に熱心に取り組んでいます。

3. 授業

先生は、学部では「学習心理学I・II」の講義を担当して、Iでは行動分析の基礎を教えています。昔 は手製の大量のテキストを使っていましたが、最近ではパワーポイントで作ったOHP形式の配布資 料に衣替えをしました。受講生の不満も、資料が「多すぎる」から「簡単すぎる」へと移り変わって いるようです。IIでは行動分析の教育問題への応用が扱われます。最新のデータに基づいて問題 が分析され、応用行動分析が提供する有効な解決策が紹介されます。この授業では、自閉症 や、学習障害や、ピアサポートなどのテーマで、大学院生も自分の実践研究について講義します。 その時は受講生から自然に拍手が起こります。労を惜しまず 純粋に研究に取り組む真摯な姿が、 清しい印象を与えるのでしょ。

この授業で行動分析に興味を持った学生は、3年生になると「心理学演習ⅢA: 行動分析学研究」 のゼミ生となり、そのうちの何人かはこの研究室で卒業論文を書きます。上智大学の他の人気ゼ ミには20人から30人の学生が集まりますが、行動分析ゼミには多くとも7、8人、少ない年には3、 4人しか集まらず、最小規模を誇ります。学習心理学といえばネズミやハトで人間の臨床はやらない だろうと最初から関心を示さない学生や、自閉症の臨床はやるらしいけれど、どうせ「こころ」は 扱わず「行動」だけを扱うだろうから関わるのはよしておこうと敬遠する学生などが多く、行動分析 はここでもご多分にもれずマイノリティです。しかし、人数が少ないことは悪いことばかりではありま せん。そのぶん、ゼミ生は疑問に思ったことを気軽に質問できますし、それに対して先生は期待し ていたものの10倍もの答えを返してくださるので、大人数では得られないアカデミックな充実感を 味わうことができます。前期では行動分析の古典を徹底的に読み、後期には最新のJABAをはじ めとする行動系のジャーナルの中から自分の卒論のテーマと関連する論文を選んで発表して討論 を深めます。上智大生の英語力には定評があるようですが、このゼミを経験すると、めきめき論文 を解読する力がついて行くのがわかります。

4年生の卒論ゼミは、毎週火曜日の3時半から2時間ほど行われています。研究室に出入りする ほとんどの学部生、院生、研究生が参加します。卒論生は、毎回プログレス・レポートを提出して、 先生ばかりでなく先輩や同学年の仲間からも鋭い指摘を受けます。さらに、役に立つ情報や援助 が惜しみなく提供されるため、質の高い論文ができあがることとなります。

大学院にはいま、博士課程に2人、修士課程に8人の院生が在籍して勉強しています。大学院の 授業は2つあります。「心理学特殊研究」では去年に続いて『スキナー・フォー・ザ・クラスルーム』を 精読しています。「心理学特殊演習」では米国政府の最新のレポート『メンタルヘルス: 米国公衆衛 生局長官報告』を読み込んでいます。これに併せて修士博士論文ゼミも行われています。臨床活 動は授業とは独立した純粋の研究活動ですが、希望すれば「心理学特殊実習」の単位とすること

ができます。

4. 研究会

私たちは月例の「行動分析研究会」を開いています。先生の私的研究会であり、東京学芸大で昭和47年から始まった自閉症の行動分析研究会(水曜夜の勉強だったので「水研」と呼ばれていた)がその前身ですので、30年近い歴史を持つ研究会ということになります。その当時中心になっておられたメンバーは、情緒障害 児学級の教員をされていましたが、今ではほとんど管理職になられています。中にはそうなられてもなお、激務を押し参加し続ける方々がおられます。

例会に出席する常連はおおよそ30名ほどです。上智大の院生と学部生、他大学の院生と学部生を中心に、小・中・高校の校長や教頭や教諭、そして教育委員会室長 や指導主事や企業の研究所の主任などです。朝10時半から出席者全員が2分間スピーチをし、午後には数名の会員が研究発表をし、それから討論を深めます。夜になると、赤坂、四ツ谷、新宿あたりの安くてうまい店に繰り出して食事をしながら、先輩たちから人間心理についての深遠な特別講義を受けることができます。研究会の顧問は、出口光、國分康孝の両先生です。

5. 軽井沢合宿

研究室のメインイベントは何と言っても春と夏の宿泊合宿です。上智大学軽井沢 セミナーハウスで年2回、2泊3日のゼミ合宿をします。ゼミの院生と学部生20人ほどが参加して、先生も含めて全員がひとり40分のもち時間で研究発表をします。合宿直前の1週間は、研究室に泊まり込んで準備し、ほとんど徹夜状態で初日に臨むという学生もあり、初日のつらさは格別なものがあります。2日目午後 の自由時間には、先生の好きなテニスをします。負けず嫌いの先生をギューと言わせてやろうと、このときとばかり腕によりをかけて挑みますが、敵もさるもの、なかなか思い通りにさせてはくれません。

6. 研究室の一日

私たちの研究室は、他のどの研究室よりも朝早くドアが開き、どの研究室よりも夜遅くまで電気がついています。午前中からケース指導や自主勉強会が始まります。勉強会のテーマは、自閉症児に対する効果的な介入法や、ソーシャルスキル 訓練や、ピアサポートなどです。学生はそれぞれ自分の興味のある勉強会に参加しています。たいがいは2つ以上の勉強会を掛け持ちでしています。

午前中のスケジュールが一段落したところで、みんなでにぎやかにお昼を食べます。ここで、他の大学や研究所で一仕事されてきた中野先生の登場です。

「やあ、こんにちは」。先生はいつもオシャレにきめています(ネクタイは必見)。インスタントみそ汁付きの愛妻弁当を広げて学生の輪に加わり、バリバリ ムシャムシャ。とてもおいしそうに食べるので評判です。

そうこうするうちに学生がぞくぞく集まってきて、狭い研究室はあふれるばかりになります。いよいよ大学院のゼミの開始です。当番が淹れてくれたコーヒー カップを片手に、寛いだ気分でじっくりと勉強に取り組みます。

一日の全ての仕事を終わると、学生たちが先生をまじえて談笑します。先生の高らかな笑い声が廊下まで響き、この笑い声は大学でもかなり有名になっています。話が盛り上がったときは、そのまま「新道通り」の飲み屋に直行することもあります。こうして研究室の充実した一日が終わります。

また私たちの研究室では、誕生日を迎えた人にバースデー・カードをプレゼント するという習慣がいつのまにか出来上がりました。誕生日になると、先生はじめ 仲間が寄せ書きしてくれた、暖かいメッセージのいっぱい詰まったバースデー・カードがもらえます。これが結構うれしいんです。

7. 結び

このように、私たちの研究室には、還暦を迎えて吹っ切れたように精力的に仕事をこなす中野先生を核として、頭も使うし体も使うヤル気十分の学生たちが群がっています。私たちは臨床経験を介してチームとして強く結束していますが、その交わりはあくまでも淡泊で、お互いに相手の立場を尊重しながら、切磋琢磨しあって充実した日々を過ごしています。応用行動分析の勉強と仕事に少しでも 関心や興味を抱かれた方は、じゃんじゃん研究室にアクセスして下さい。ヤル気のある方、ぜひ一緒に勉強しましょう。お待ちしております。

求人情報

1. 採用職名：大阪市立大学文学部講師（または助教授）1名
2. 専門分野：生理学的心理学
（特にオペラント条件づけに基づく行動研究を主とする神経科学分野）
3. 担当科目：全学共通教育科目（「心理学への招待」、「心と脳」など）、
生理学的心理学特論、人間行動学基礎演習、心理学実験演習、卒業論文の指導など
4. 応募資格：採用時35歳未満、修士以上の学位を有する者。
博士号を有することが望ましい。
5. 採用予定日：平成13年4月1日
6. 提出書類：（1）履歴書
（市販用紙利用、所属学会も明記、最終審査時に大学所定の
様式に書き直し請求）
（2）研究業績リスト
（3）主要論文（別刷）5篇以内、各1部
7. 応募期限：平成12年9月30日（当日消印有効）
8. 応募書類の提出先：
〒568-8686 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学文学部心理学教室
金児暁嗣（電話/FAX：06-6606-2377）
「人間行動学科心理学コース専任教員応募書類在中」と朱書し。
書留郵送のこと。

編集後記

横浜国立大学の渡部先生と交互にニューズレターを担当させて頂くことになりました。私に与えられた最初の仕事は、とにかくニューズレターの遅れを取り戻すことでした。諸先生方のご協力により、なんとか「夏号」である本号を8月末に発行することができました。なお、本号から新たに書評欄を作りました。『行動分析学研究』にも書評欄はありますが、もう少し短く肩肘張らないものを掲載していく予定です。学会員であれば著者・訳者自身の原稿も可ということで、名称を「こんな本を書いた！ 訳した！ 読んだ！」にしました。学会員に有益な情報という観点で投稿を募ります。書名・著者名（訳者名）・出版者・出版年月・価格（税別かどうか）を記して頂いた後、紹介文・批評文を1000字以内でお書き下さい。書評対象は原則として新刊書（過去1年以内に出版された本）に限りたいと思います。（中島記）

J-ABAニューズ編集部

皆様からの記事を募集しています。研究室や施設・組織の紹介、用語についての意見、学会に対する提案や批判、求人・求職情報、イベントや企画の案内など、さまざまな内容に関する記事を期待しています。原稿はテキストファイルの形式で電子メールかフロッピー(DOS)により、以下の編集部までお送り下さい。掲載の可否は編集部で判断してお返事します。なお、掲載された記事の著作権は日本行動分析学会に属し、ホームページでの公開を原則にしています。メールアドレスなど、一般公開を望まない情報がある場合には、事前に編集部までご連絡下さい。

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1 立命館大学文学部 望月昭
TEL & FAX: 075-466-3189 E-mail: mochi@Lt.ritsumei.ac.jp